

英語の発声表記—その目的と用法—

北山 長貴

1・1・1 Spelling Reform

英語においては同じ音をさまざまな字母で表したり、同じ字母がさまざまな音を表すというように、綴り字と発音は完全には一致していない。このような綴り字と発音の不一致のために古くから言葉を正しく綴ろうとする書記法である正字法が試みられてきた。文字と音声の一致する度合は適合(fit)と呼ばれ、そして適合した綴り字は表音的な綴り字(phonetic spelling)と呼ばれる。この綴り字を求める運動は英国においては16世紀以降なされているが、その後今日に至るまで様々な試みが行なわれてきた。

古英語の発音は現在正確に再現することは不可能である。しかし、古英語の音価を推定するための前提としては次のことが考えられている：(1) 綴り字は実際の発音を写したものであり、黙字はなく同一綴り字は同一の音を表す；(2) 綴り字は音声上の示差的な差異のみを表し音素的である⁽⁴⁾。このように古英語の時代においては綴りと音に対して、いくつかの例外はあるが、現在と違い一対一の対応というものがあつた。

しかし、なぜ現在では一対一の対応がなくなったのだろうか。それは今まで英語が受けてきた歴史に負うところが大きい。まず、1066年のNorman ConquestによりNorman French系の筆写法が入り込み中英語の綴り字は混乱した。その後Caxtonの印刷術導入(1467年頃)は印刷により綴り字への制約を与えることは出来たが、これも綴り字は印刷者次第であり固定化をもたらすまでにはならなかった。また、ルネッサンスの時代に入ると特にラテン系のことばはその語源通りに綴ることが流行り、綴り字の無秩序、不統一はさらに増した。このように、古英語以来の音素的な綴り字法とラテン的な綴り字法の共存による混乱は、そのまま印刷による

綴り字の制約により固定化されていった。その後、14世紀後半から16世紀にかけて起こった大母音推移("the Great Vowel Shift")は固定化した綴り字の発音を変えてしまう結果となった。

英語はそのはじめスペリングが実際の発音を示していたと考えられている。しかし英語が被った様々な影響により、人々はスペリングを覚えるために特別の努力を払わなくてはならなかった。つまり、綴り字と音の間に大きな溝ができたのである。以上の様な背景により、英語において綴り字を改良しようとする動き(spelling reform)が出てきた。

1・1・2 表音主義と伝統主義

綴り字と発音の不一致の溝を埋めるため、早くも16世紀中ごろから、様々なspelling-bookが登場しはじめた。その中で、Sir John Cheke(1514-1572)は綴り字改良の最初の実践者であつた。彼は、ギリシャ語学者として同じCambridgeの学者Sir Thomas Smith(1513-1577)とギリシャ語の発音に関する論争から綴りと音の関係に興味を持ちはじめたとされている。Checkは表音主義の綴り字(音標記号)の実行者であり、新しい綴り字をあみだそうとしていた。これは一字に対して一音を、一音に対して一字をあてるという実際的な表音主義ではあつた。しかし、これは音声学のような純粹に音を観察するものでなく、発音と表記の関係を述べるものであつた。音声学の始まりと発達は17世紀まで待たなくてはならない。

当時、綴り字改革の表音主義に対して改革の必要がないと主張した学者もいた。これは伝統と習慣を重んじ現実に即すといった考えの伝統主義である。Richard Mulcaster(1530-1611)は

発音は絶えず変化するもので綴り字をそのまま表すことはありえないとして、現存する綴り字体系を理論づけようとした。

17世紀にはいり音声学が発達した。これに伴い音に対する研究が中心となり、英語の綴り字の問題は二次的となった。綴り字の問題は教育で扱われるようになり、伝統的な綴り字をまとめ、それを教えるという方向になっていった。そして、Cheke, Smithの表音主義はその綴り字の変更の煩雑さも手伝い Mulcaster の伝統主義が国民に広く受け入れられていった。表音主義を主張してきた学者は新しい記号を作るのではなく、既存のアルファベットを使用して改革する方向となった。つまり spelling を変えるのではなく、伝統的な綴り字を読むための補助記号 (diacritics) を考案することになる。Richard Hodges は聖書を正しく読むための補助手段としての記号を次のように考案した⁽²⁾。

- ・ (長いことを示す) gâte, grêat etc.
- (読まないことを示す) garden, knôwn etc.
- th, f, s̄ (有声を示す) the, Primrôse, of etc.
- ñ=y Eñglish etc.
- ę=i Ênglish etc.
- ê=i âppêar etc.
- ę=æ uncertain etc.

このように17世紀後半以後、伝統的な綴り字の読み方を教えること—不規則な綴り字や誤りやすい綴り字の解説や読み方を教えること—が中心となり、表音主義の学者は新しい文字による綴り字改革には関心がなくなっていった。その結果、17世紀後半までに多くの spelling-book が出版され、ベスト、ロングセラーとなった。このような形で英語における綴り字は安定することになる。

1・2 発音辞典

16世紀に始まった綴り字問題は一応17世紀末には安定と統一の方向にあった。これまで綴り字は文法書で扱われていた問題であった。しかし18世紀後半における辞書の発達により綴り字

問題が再発した。これは、Dr. Samuel Johnson が Johnson's Dictionary (1775) において綴り字と発音を扱ったことにはじまる。Johnson は変化する発音よりも変化しない綴り字を基本に考えるべきであるとして、発音を綴りにあわせ、発音と綴り字の間に完全な一致を求めた。これは今までの綴り字改革の方向とまったく逆のものであった。しかし綴り字に関しては Johnson の辞書により固定した。

そして次に発音の固定化ということで、その細かい分析が様々な辞書においてされた。William Kenrick (1725-1779)、は母音字に1から16の数字を付け母音の音価を区別している。Thomas Sheridan (1719-1788) は母音に関して、“a, e, i, o, u”にそれぞれ三種類の発音、“y”に二種類を認める分類を以下のようにしている⁽³⁾。

	1	2	3
a	hat	hate	hall
	1	2	3
e	bet	bear	beer
	1	2	3
i	fit	fight	field
	1	2	3
o	not	note	noose
	1	2	3
u	but	bush	blue
	1	2	3
y	love-ly	lye	

John Walker (1732-1807) は基準となる発音 (good usage) の確立が必要だとしている。彼らは、個人、階級、方言などにおいてその発音が違うことを指摘し、そして英語発音の一様化を確立しようとする迄に至った。これは辞書による発音の標準化、固定化であり、学者、上流階級、一般大衆において、広く容認される発音を目指したものであった。

このように18世紀後半に英語発音辞典が次々と出版された。これにより綴り字の固定化とその発音の固定を進め、しかもそれが別々に安定していくことになった。

2・1 音声表記

17世紀において純粹に音に対して研究を行な

う音声学が発達した。これに伴い、スペリングにこだわらず音を記号により表記することができるさまざまな音声記号が考案された。これは、辞書の発達、つまり辞書にその音を表記してゆく必要性からも有意義であった。発音記号により、スペリングによる不統一を排除し、単音とそれを表す記号との間に整然とした一対一の対応関係を成立させた。

このような背景、歴史下において、さまざまな音声記号が考案された。その表記方法は以下のような種類に分けることができる。

- (1) 単音を発音する際の音声器官の働きを分析的に表し、記号を字母的に用いないもの
- (2) 単音を従来の字母とは関係のない記号で表す。そしてその記号を字母的に表すもの。
- (3) 単音を主として普通のローマ字で表すもの。

以上の3つの分類は服部(1984.p.51)によるものである。

また、Abercrombie(1967)では、同じ分類をさらに体系的に表している。まとめてみると以下のようなになる。

Phonetic notations

- (1) Analphabetic notations
- (2) Alphabetic notations
 - a) Non-roman notation (iconic)
 - b) Roman-based notations

Abercrombieは音声記号をまず、字母的なものと、非字母的なものに分類している。そして(2)の字母的なものはさらに、(a)非ローマ字的なもの、(b)ローマ字的なものである。(1)の非字母的なものは服部の分類では(1)にあたるものである。そして、Abercrombieの(a)は服部の(2)、(b)は(3)にそれぞれ対応しているといえる。次において、Abercrombieの体系に従って一つ一つの分類とその例を見ていく。

2・2・1 Analphabetic notation

Abercrombieは(1)の analphabetic notationを以下の様に定義している。

- (1) Analphabetic notations represent each segment by a composite symbol made up of a member of signs put together.(p.112)

これは発音の個々の器官の働きをいくつかの symbol で表し、その総合体として一つの発音を表すもので、“iconic”なものといえる。この方法で、O. Jespersen, “The Articulatory of Speech Sounds”(1889)そして、K.L.Pike, “Phonetics”(1943)においてそれぞれ発音表記が試みられた。具体例として、イエスペルセンが1889年に発表した、Analphabetic notationを見てみたい。これはある単音を表すために一つ一つの音声器官の働きを分類してそれを数字で表す。そしてその単音の調音に重要な役目を務めている器官はもちろん、その際に積極的な働きを示さないものまでも、ギリシャ文字で表記する。例えば、“all”の母音は以下のようなになる。

$\alpha 6^b \beta e \gamma 5^{\delta} \theta \epsilon 1$

このような非字母的な音声表記は音の生理や調音の仕組みを克明に記述している点においては便利である。しかし、複雑すぎて記憶も容易でなく、また単音以外に使用するのは、困難である。

また、Abercrombieは iconic な表記である non-alphabetic notation では、指定された器官なり調音方法はそれを作った学者の理論にしか対応することができず、例えばその理論が修正されるともうその表記記号は機能しなくなってしまうと指摘している。

2・2・2 Alphabetic notation

次に(2)の Alphabetic notation についてであるが、Abercrombieは次の様に定義している。

- (2) Alphabetic notations are so called because they are based on the same principle as that which governs ordinary alphabetic writing, namely that of using one single simple symbol to represent each segment. (p.112)

これは(1)とは反対に一つの symbol を用いて発音を表記するものである。そして、(a)Non-roman notations, (b)Roman notations の二つにさらに分類され、定義はそれぞれ以下のようなものである。

(2) Alphabetic notations

(a) Non-roman notations; invented notations which are alphabetic in principle but which are not based on the roman or any other existing alphabet.

(b) Roman notations; the most obvious basis for an alphabetic notation.

(a)はまったく新しいsymbolを使用するものであり、(b)は今までにある Roman-character とそれを modified したいくつかの記号を使用する方法である。

(a)については、音声記号はローマ字によって必ず表記される必要はない。またローマ字は音の性質を示すことは出来ないから全く別の記号を字母的に用いることもできる。このような理由から考案されたのが、A.M.Bell の “Visible Speech” である。これは単音をその調音の位置や様式を象徴的に示す記号で表すことを原則としている。

Non-roman notations において、Abercrombie はその有様性を認めていないようである。その理由として彼はこの記号は iconic な記号であり、arbitrary な記号ではないとしている。iconic であるということは、(1)の説明であるようにその記号を考案した者の理論に基づいて理解されなくてはならない。つまり、固有の言語、固有の理論においてのみ有様であり、普遍性に欠けるものである。

2.2.3 IPA

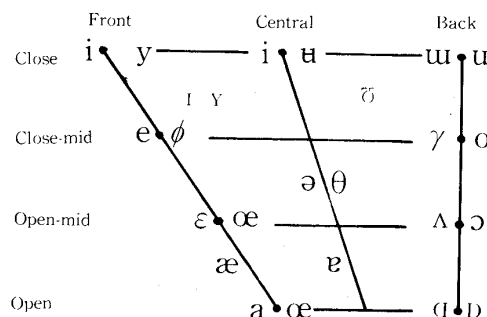
Roman notations と non-roman notations を比較してみると、その arbitrary という点から前者が後者よりすぐれていると考えられる。Roman notations による表記は数多くある。いずれもひとつの言語を表すためのものではなく、数多くの言語、方言を、または世界の言語に現われる共通の音を表記するために工夫されている。その中で一番広く用いられているのは、IPA つまり International Phonetic Alphabet と呼ばれている、国際音声学協会所定の記号である。これは、この協会の前身である The Phonetic Teachers' Association が1882年に設立され、

当初は外国人の英語教育のための音声学を主に取り扱っていた。その後一般音声学の問題も取り扱おうという要望がおこり、1886年6月に協会の機関誌、*Dhi Fonètik Tiltcer* の編集者 Paul Passy 宛ての Jespersen の手紙により、あらゆる言語に適用しうる音声字母を考案しようと提案し、二年後の1888年8月には国際音声字母が発表された。

IPA により考案された表記法は1949年にロンドン大学のIPAにより出版された “Principles of the International Phonetic Association” によりその原則が確立された。その結果、使用される記号の数は必要条件を満たすに十分なだけとし、また補助記号は必要最小限にとどめるものとなった。その後、この原則に則し幾度と表記記号の改訂、分類の変更が行なわれてきた。1989年に改訂された母音表記は以下のである。

IPA Vowel System (1989)

VOWELS



Where symbols appear in pairs, the one to the right represents a rounded vowel.

3.1 現在の発音表記体系

前章において、英語における綴り字と発音の関係性を述べてきた。そこでの問題は綴り字と発音が適合 (fit) できないことであった。その理由は綴り字と発音の関係において、それぞれが歴史的な影響を受けて変化し、共に不安定であったためである。この問題解決は、まず Johnson の辞書をはじめとする多くの spelling-book (綴り字則本) がまず綴り字を固定したことにより始まった。そして18世紀半ばころからアクセントを辞書に載せるようになり、辞書と発音が結びつき18世紀後半には英語の発音辞典が出版さ

れ発音も固定し始めた。その後、音声学的な分類を基に発音が辞書に載せられ、綴り字とは別に個々の語の発音を客観的に記述する様になった。つまり現在においては綴り字と発音をそれぞれ正しく表記することが求められている。

20世紀に入り本格的な英語の発音辞典が出版された、その中で重要なものはDaniel Jones編集の“An English Pronouncing Dictionary”(1917)である。この辞書にA.C. Gimsonは13版以降編集に協力をし、そして14版から母音に関して改革を行なっている。これは以前のジョーンズ式に対して音の質について区別をつけるギムスン式と呼ばれている。以後、ギムスン式は多くの英国の辞書で使用され、次に示すIPAの原則に従っている。

1. Wherever possible, differently shaped letters should be used for any two sounds that can distinguish one word from another in a single language.
2. Wherever possible, a single letter should be used for two sounds that are so similar that they never distinguish one word from another in a single language.
3. Wherever possible, only letter shapes that harmonize typographically with letters of the roman alphabet should be used.
4. Wherever possible, use diacritics only in four circumstances; (i) for suprasegmental phenomena like length, stress, and intonation; (ii) for marking allophonic distinctions; (iii) where one diacritic can make it unnecessary to design a whole set of related new characters; (iv) to represent minute shades of sounds for scientific purposes.
5. Wherever possible, development of the alphabet should be along lines that accord with the phonemic principle and the Cardinal Vowel system.

英語の音声表記に関しては以上の原則に従ってIPA方式が広く使用されている。次に、実際の音声表記がどの様に扱われているかを特に母音について、最近3年以内に出版された英国に

おける代表的な英語辞書、英語学習用辞書、発音辞典において見てゆく。

3・2・1 OED

The Oxford English Dictionary; the first edition (OED 1) ではその序において、発音を“actual living form or forms of a word”(OED p.xxxiv) と表現している。発音はことばの生きた姿、ことばそれ自体であり、綴り字によって示されるものは一つの象徴にすぎないとしている。つまり、耳によって認識されるものが生きたことばなのであり、目によって認識される綴り字は象徴なのである。象徴として表示された音を忠実にそして規則的に再現するためには、文字の持っている音価と実際の音が一致することが必要である。OED 1では以上の理由でローマ字(Roman letters)とそれらを補う補助記号を使用した。

母音についてはその長さ(length)で四種類に分類してしる。Ordinary (or short) quantity を基本にして、これに補助記号(ː)を付けて long quantity を、(ˑ)で medial quantity を、そして(˘)で obscure quality を表している。また現代英語にはない外国語や初期の英語を表記するために、(||)を母音の横に付けるなどの工夫がされていた。OED 1での音声表記は単語の持つ音価を忠実に再現することを目標にしており、その意味で音声的(Phonetic)な表記といえる。

OED 1の音声表記は初代編集主幹であったSir James Murrayが考案したものでありそれ以降、1987年に出版されたNew Supplementまで同じ表記方法が使用されてきた。そしてOEDは1989年に61年ぶりに改訂された(OED 2)。音声表記に関して、OED 2では、現在IPA方式が広く受け入れられ理解されているという立場から全面的にIPA方式に音声表記法が改訂された。これはMurrayの表記法に問題があるのではなくIPAを使用することにより、英語における方言、外国語の表記が以前と比べ容易になるためとしている。そして、OED 2の序ではMurrayの表記法について、“As a means

of representing standard English Pronunciation, Murray's system is sensitive and generally lucid”(p.xix)と述べ、その評価は変わっていないことを明言している。そして、OED 2においてはMurrayの表記をコンピューターを使いIPA方式にそのまま平行移動させているだけであり、改訂にあたり新たな発音に関する調査は行なわれていない。

以下にOED 1, OED 2における母音表記の比較を試みる。

OED2	OED 1
SHORT	
I as in <i>pit</i> (pit), <i>-ness</i> , (<i>-nis</i>)	…i, é, î, ĭ
ε …… <i>pet</i> (pet), Fr. <i>sept</i> (set)	…e
æ …… <i>pat</i> (pat)	…æ, æ̃, a
ʌ …… <i>putt</i> (paet)	…ɒ
ɒ …… <i>pot</i> (pɒt)	…o, ɔ, ɔ̃, ɔ̄
ʊ …… <i>put</i> (pʊt)	…u
ə …… <i>another</i> (ə'nʌðə(r))	…ə, ɜ̃, ē, ē̃, ɔ̄, ɔ̄̃, ū
(ə) …… <i>beatən</i> ('bi:t(ə)n)	
LONG	
i: as in <i>bean</i> (bi:n)	…i, î
ɑ: …… <i>ban</i> (bɑ:n)	…a, ā
ɔ: …… <i>born</i> (bɔ:n)	…o, ɔ̄, ɔ̄̃, ɔ̄̄, ɔ̄̄̃
u: …… <i>boon</i> (bu:n)	…u, ū
ɜ: …… <i>burn</i> (bɜ:n)	…ɜ̄, ɜ̄̃
DIPHTHONGS, etc.	
eɪ as in <i>bay</i> (beɪ)	…ē (ē ¹)
aɪ …… <i>boy</i> (boɪ)	…ai, əi
ɔɪ …… <i>boy</i> (boɪ)	…oi
əʊ …… <i>no</i> (nəʊ)	…o, ɔ̄ (ɔ̄ ^u)
aʊ …… <i>now</i> (naʊ)	…au
ɪə …… <i>peer</i> (piə(r))	…ī (ī ^o)
ɛə …… <i>pair</i> (peə(r))	…ē (ē ^o)
ʊə …… <i>tour</i> (tʊə(r))	…ū, (ū ^o)
ɔə …… <i>boar</i> (bɔə(r))	…ō, (ō ^o), ū ^o

OED 1ではordinary vowelを無標母音とし、そして他の長さが違うものを有標として補助記号を使い表示している。その結果4つの長さに母音を区別し、それをordinary, long, obscure vowelの3つのグループに分けている。

そしてOED 2では以上の分類をshort, long, diphthongという区分で分類しなおしている。これは、IPA方式の原則を取り入れたため

ある。OED 1とOED 2の音声表記体系の違いは以下の通りである。

第一に、OED 1におけるobscure vowelはOED 2においてshort vowelに吸収されている。いくつかのobscure vowelはその母音が持っている元の音価に戻されている、例えば、(ǣ)は(æ)に、(ĭ)は(i)に、などである⁴⁾。しかし他のobscure vowelは全てschwa(ə)に吸収されてしまっている。これにより、OED 1においてはその潜在的な音価が表示されていた母音(e, o, u)などもOED 2では記述しきれなくなっている。これらのobscure vowelsが歌や口調において強勢が付いた場合、この表記方法では潜在的な音価が再生出来なくなってしまう欠点がある。第二に、OED 1では長母音と二重母音をまとめてlong vowelとして扱っていたが、OED 2ではlongとdiphthongという二つの項目に分類している。そしてordinary vowelをOED 2ではshort vowelと変更している。これにより、音価がshortでないものはそれぞれ他の分類へ平行移動されている。

OED 1はMurrayの表記方法により音声的、極めて精密に記述されていた。しかし、OED 2ではMurrayの表記方法をそのまま継承しているにもかかわらず、IPA方式を導入したために、obscure vowel等については、音声的というよりはむしろ、音素的な表記になっているといえよう。

3.2.2 LPD

発音辞典に関してはJ.C Wells編集によるLongman Pronunciation Dictionary (LPD)が1990年に出版された。LPDにおけるその表記方法はその序で述べられている。現在、多くの発音辞典ではごく一部の不一致を除き、おおよそ先に述べたIPAのprinciplesに従っている。しかし、LPDにおいてはWells自身その記述方法をGimson編のJones's Pronouncing Dictionary第14版 (EPD-14)にその多くをたよっていると述べている。そして以下の点においてEPD-14と異なっていると述べている。

- (i) The symbols i, u are used for i:~ɪ u:~ʊ,

in positions of neutralization.

(ii) Certain different abbreviatory conventions are used.

(iii) The stress-marking of words with three or more stresses is different.

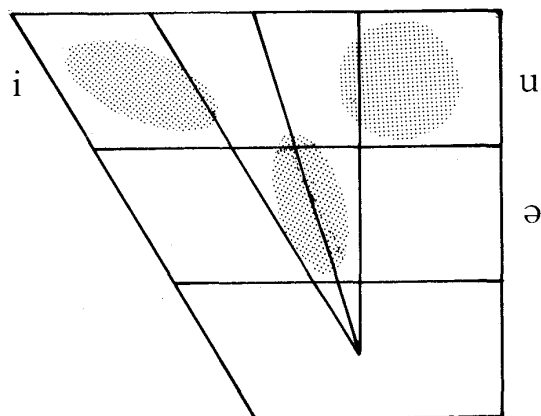
(iv) Syllabification is shown by spacing. (p.xviii)

これらは(i)の母音の表記以外については補助記号、強勢、音節境界などであり、音声表記に関してはそう違いはない。音声表記に関しても以下に示す様に、その記号が一部 Jones と異なるだけである。

Jones		LPD
short	i	ɪ
short	ɔ	ɒ
short	u	ʊ
long	ə:	ɜ:
	ei	eɪ
	ou	əʊ
	ai	aɪ
	au	aʊ
	ɔi	ɔɪ
	iə	iə
	ɛə	ɛə
	ɔə	ɔ:
	uə	ʊə

Wells はこれらの母音を5つに分類している。AからEグループまであり、Aは短母音、Bは /i, ɪ/ で終わる長母音、二重母音、同じく /u, ʊ/ で終わるCグループ、/ə/ で終わるDグループ、そして弱母音のEグループである。

Eグループの弱母音に関しては /i, u, ɪ, ə, ʊ/ の5つを示している。常に弱母音である /i, u, ə, / の3つの音価は以下の図の様に示している。(p.xvii)



この図によると、他の母音より広い範囲を示しており、その音価に幅をもたしている。

3.2.3 CCD

Collins Cobuild English Language Dictionary (CCD) は特に英語教育という点から、英語学習者、英語教育者に対しての説明に力を注いでいる辞書である。

音声表記に関して CCD も IPA 方式にほぼ従っている。母音はその variant との関係において二種類に分類されている。まず、ボールドタイプで表記された母音は protected vowel と呼ばれている。これは強勢を受けている母音で、その音の異形はほとんどないことを示している。つまり一種の強母音である。そして、弱母音についてはその多様(異音)な発音を否定できないとしている。その立場から弱母音は superscript と呼ぶ補助記号を(母音の右肩に数字で)付ける方法で、その示された音の異形体を表記しようとしている。例えば、"cinema" /sɪnə¹mə/ における /ə¹/ は [ɪ] と [ə] の間の音価を持つということを示している。このように CCD の表記では /ə/ の variant を以下の様に10種類に分けている。

ə ⁰ (ə ↔ 0)	ə ⁵ (ə ↔ ɜ:
ə ¹ (ə ↔ ɪ)	ə ⁶ (ə ↔ əʊ)
ə ² (ə ↔ ɛ)	ə ⁷ (ə ↔ ʊ)
ə ³ (ə ↔ æ)	ə ⁸ (ə ↔ ɔ:
ə ⁴ (ə ↔ ʊ)	ə ⁹ (ə ↔ ʌ)

この辞書の表記は上記の辞書と比べて音素的である。しかし、この superscript を子音などにも使用することによりその表記を精密にしている。

4・1 母音表記：弱母音

最近3年間に英国で出版された辞書、O E D 2、L P D、C C Dの発音表記を母音を中心に見てきた。

O E D 1とO E D 2を比較した表からは、O E D 1のいくつかの表記がO E D 2では1つの同じ表記で記述されていることがわかる。特にこれは、obscure vowelの場合である。母音に強勢が与えられていない時には全ての母音はmid-mixed vowel、つまり[ə]の音に近くなる。このような母音を弱母音と呼ぶ。O E D 1においては母音に補助記号(˘)を付け弱母音を表記していたが、I P A方式に従ったO E D 2の記述はほとんど(ə)となっている。しかしこの弱母音に強勢がおかれた場合、O E D 1ではその潜在的な音価が表記されているので再生は可能であるが、O E D 2では不可能である。

同じ問題はI P A方式を使用している他の2つの辞典においてもみられることである。C C Dに関しては先に述べたように、弱母音の右肩に補助記号の数字を付けてその元の音価を表示しようと試みている。またL P Dは弱母音を5つに分類し、その環境、条件を定義している。

L P Dでは次に分類した環境においてそれぞれの母音がweak vowelとして現われるとしている。

- 1) 語尾が綴り字“y”、母音の前の綴り字“i”の時の/i/。
- 2) 綴り字“a,u,e,i,o”の時の/ə/。
- 3) 母音の前の綴り字“u”の時の/u/。
- 4) 綴り字“i,e”の時の/ɪ/。
- 5) 子音の前の/ʊ/。

1) C C Dは“happy,city”に/i/、そして“previous,glorious”に/ɪ/と違った音価を与えている。しかし、L P Dではこれら全てを/i/で表記し、/i:/よりも弱い発音であることを記述しようとしている。O E D 1では

obscure vowelの記号はなく、O E D 2においてもshort vowel/ɪ/として表記している。

2) “China, album”などにおける綴り字“a,u”はほぼ全て/ə/となり弱いアの音となる。ただし、“u”についてはいくつかの例外があり、O E D 2では“August”に/ʌ/、またC C Dでは“suppose”に/ə⁹/という表記を与え[ʌ]の音価を持つものと記述している。次に、綴り字“e,i,o”は前者より元の響きを保つようである。例えば、C C Dでは“moment”に/ə²/ (əとɛの間)、同じく“April”に/ə¹/ ([ə]と[ɪ]の間)を、O E D 2においてもAprilに/ɪ/を与えている。そして、C C Dでは“contain”を/ə⁷/ ([ə]と[ɒ]の間)と表記している。

3) 母音の前の“u”は“influence,situation”のように/ju/、/tʃu/などの形で現われる。L P D、C C Dではそれぞれ/u,ʊ/を使い表記している。特にO E D 2では[u:]で記述しており、弱いウの音とはいきれない。

4) 綴り字が“i,e”の場合。L P Dでは“explain,extend”が[ɪ]に近い音として表記し、variantとしてのみ/ek-,ək-/を認めている。一方、O E D 1,2では/ɛ/、C C Dでも同じように/ɪ²/と[ɛ]に近い音価を与えている。そして、“intend, rabbit”等ほどの辞書においても/ɪ/で表記されている。以上のことから、O E D、C C Dでは“explain”と“intend”の最初の音を対立するものとして表記している。また、“ability, harmless”などはL P Dにおいて[ə, ɪ]の両方の音価を与えている。

5) “stimulus, educate”の様に“u”が子音の前にある語について、L P D、O E Dは/ʊ/で表記している。これは普通/ju/、/tʃu/、/dʒu/という形で現われる。C C Dだけは、/ə⁴/と表記して[ʊ]の音価を持った/ə/としている。

以上の様に弱母音についてその表記を比較してみた。表記の精密性という点からするとやはり、O E D 1が優れている。I P A方式を取り入れたO E D 2、そしてL P D、では元の音価というものが示されていない。発音辞典である

L P Dは variantとして表記を並列して記載している。C C Dでもほとんどの弱母音に[ə]の表記を与えているが、補助記号の数字によりその元の音価を表示することが出来ている。

4・2 母音表記：O E D 2

61年ぶりに改訂されたO E D 2における母音の表記を、特にI P A方式とは違った表記をしている部分について他の辞書と比較しながら見ていきたい。O E D 2ではその序(pp.xx-xxi)において現在の音声表記とは異なるいくつかの音の対立を以下の様に認めている。

- 1) 強勢のある閉鎖母音と二重母音との対立。
([i: -ɪə, u: -ʊə])
- 2) 強勢のない閉鎖母音と短母音との対立。
([i: -ɪ, u: -u])
- 3) 強勢のない音節における[əʊ-ə]の対立。
- 4) 成節子音と"schwa"+子音の対立。
- 5) 二重母音[ɔə]と長母音[ɔ:]の対立。

1) O E D 2では、“idea,realize”の強勢のない音節を(i:)と表記し、そして“dear,rear”の母音を(ɪə)として対立させている。同じように、“museum”の(u:)と、“secure”の(ʊə)とを対立させて表記している。しかし、L P D, C C Dでは/i: -ɪə /, /u: -ʊə /の対立は認めず、それぞれ二重母音の[ɪə], [ʊə]で表記している。“museum”の表記についてL P D は短母音[u]を使い、またそのvariantとして[u:]の記載もみられる。

2) “delineate, creation”などの語において強勢のない音節を(i:)と表記し、そして“genius, demonic”においては(ɪ)と表記し対立させている。同じように“perpetual”の(u:)と、“circulate”の(ʊ)を対立するものとして表記している。L P Dでは、“creation”と“demonic”をO E D 2と同じように対立させているがその表記は[i]と[ɪ]の対立である。これは母音の長さによるものではなく質による対立である。一方、[u:]と[u]の対立は認めず全て/u/で表記している。C C DはO E Dと同様に[i:], [ɪ]の対立を認めている。そして、“perpetual,

circulate”の対立に関してはそれぞれ[ʊ⁰],[ə⁴]と表記しており一応対立させている。

3) “homographic, protocol”を二重母音の(əʊ)そして“homonym,melody”を短母音の(ə)で表記して対立させている。L P D, C C Dではその対立は認めず、[ə]で表記している。またC C Dでは“homogeneous”などは/ə⁶/という表記で[ə]と[əʊ]の中間の音価を与えている。

4) これは“principle, principal”の対立である。O E D 2それぞれ(-p(ə)ɪ), (-pəɪ)と表記して対立させているが、L P D, C C Dでは対立させず同じ表記である。ただし、それぞれ/-p^əɪ /, /-p^əɪ /と表記してありその音価は不安定のようなのである。

5) “boarder, mourning”に二重母音(ɔə)を、そして“border,morning”に長母音(ɔ:)を与えて対立させている。L P D, C C Dでは長母音/ɔ:/で表記しその対立は認めていない。

O E D 2の表記で問題となるところを他の辞書の表記法と比較してみた。対立という観点において、O E Dでは多くの対立を認めている。これに対して、L P D, C C Dの表記ではその一部において対立を認めているにすぎない。対立を多く認めるということは、それだけ表記体系を複雑にしていることになる。一方、対立を多く認めないということは、それだけ精密な表記体系ではないということである。このように、音声表記においてその表記体系の精密さと簡素さは常に問題となっている。

4・3 For Further Study

音声を体系的にそして一貫して表記しようとする方法を“transcription”(notation,script)と呼んでいる。これは大きく分けて、“phonemic transcription”と“phonetic transcription”がある。その違いを一言でいうと、音素表記はある言語において最小の意味の対立をなすものだけを音素として認めていくことであり、これは非常に簡素である。そして音声表記は一つ一つの音を忠実に表記していくことである。つまり、前者は一つの言語においてある体系をもって記

述するものであり、後者は音を音響、調音的な面から記述するものである。音声表記の場合その忠実さという点において多様な記述が可能であり、普通、“narrow transcription”（精密表記）と“broad transcription”（簡素表記）の二種類がある。

本稿で扱った辞書においてはその表記方法がさまざまに工夫されていた。表記においてあまりにも音素的になってしまうとその表記の“reproduction”は難しくなる。あまり精密になるとその利用が不便になる。

また、本稿では扱えなかつ問題となることがいくつかある。まず、ここで扱ったRPの母音以外にGAなどについての表記。そしてコンテキストの問題である。CCDではその序においてコンテキストにおける強勢の有無についてふれている。そして、LPDは複合語における“stress shift”の表記を補助記号を使って記述している。

以上の様に、言語の記述という点からすると発音表記は単語レベルだけでは不十分であり、複合語、句、節など、さまざまなレベルにおける表記の研究が必要である。

[註]

- (1) 松浪 有 他。「英語学事典」p.164.
- (2) 渡部昇一。「英語学史」p.96.
- (3) Ibid., p.260.
- (4) OED 1, 2において音声表記は（ ）を使用しており、本稿でもそれに従う。

Referenoes

- The Oxford English Dictionary-2nded.* 1989. Oxford University Press.
- Collins Cobuild English Language Dictionary.* 1987. William Collins Sons & Co Ltd.
- Abercrombie, David. 1967. *Elements of General Phonetics.* Edinburgh:Edinburgh University Press. 1982.
- Crystal, David. 1985. *A Dictionary of Lingusitics and Phonetics.* -2nd ed.Oxford: Basil Blackwell. 1987.
- Gimson, A.C.1962. *An Introduction to the Pronunciation of English.* -3rd ed. London:Edward Arnold Press. 1981.
- Hattori,Shiro.(服部四郎).1984.「音声学」岩波書店

- Jones, Daniel. 1977. *Everyman's English Pronouncing Dictionary-14thed.* London:J.M.Dent & Sons.1982.
- Matsunami,T.(松浪 有).1983.「大修館英語学事典」大修館書店
- Pullum,G.K. and W.A.Ladusaw.1986. *Phonetic Symbol Guide.* Chicago:University of Chicago Press.
- Watanabe,Shouichi.(渡部昇一)1975.「英語学史」「英語学大系」13 大修館
- Wells,J.C.1990. *Longman Pronunciation Dictionary.* England:Longman.